中川根ふる里通信

＝第18号＝

編集・発行・モア・ラブ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾859～6
郵便振替口座 ふる里通信係
〈名古屋〉7－81556

月見草（オオマツヨイグサ）が咲いてます

大井川支流中津川河口附近、夏至に近い宵闇せまる頃19：15頃より、ポッ、ポッ、かすかな開花の音とともに、見る見る、花が咲きました。花の命は短かくて、明朝にはしぼむのです。

娑羅双樹の花（別名ナツツバキ）

インド、クシナガラ城外、沙羅の林の中、釈迦の病床の四方に、二本ずつ相対して生えていたという沙羅の木、釈迦が入滅した時、鶴のように白く枯れ変じたという。

ツバキ科の落葉高木で、大きいものは高さ一五m、径六〇cmぐらいにもなるという。花は径五・六cmで美しくササンカの花に似ている。花は一日花。

ナツツバキとよく似た木に、ヒメシャラ（姫沙羅）があり、木肌がつるつるしていて、サルスベりの通称もある。花は二、三cmで小さいが、ナツツバキの花と似ている。

大札山、山大段方面に、ナツツバキもヒメシャラもブナやウラジロモミなど多くの植物と共に温帯樹林を形成しています。六月中旬から七月下旬にかけて花が咲きますが、ヤシオの花や夏休み、紅葉時のように訪れる人もあまりない雨の中、露の中にひっそりと咲く、この花はやがて結実して森の住人の生きていく種となる。高貴の花と言えると思います。

児童救助で殉職
中村康彦教諭（三十才、高郷出身）

七月六日午前十時ごろ、桧原郡相良町片浜海水浴場で、水泳訓練をしていた、片浜小学校の三年の児童六人がおぼれて、救助しようとした中村先生が水死しました。

児童は幸い救助されましたが、残念ながら中村先生は、帰らぬ人となりました。片浜小学校の児童、学校関係の皆さんはもとより、出身地区高郷のご家族（父中村喬吉さん）は、あまりに突然の悲報に、駆けつけた時は、無言の対面となってしまいました。

九日、中川根町山村開発センターに設けられた葬儀会場には、斉藤県知事はじめ、学校父母、遺族、地元関係者ら四百人余りが参列し、若く、志半ばで逝った中村先生に別れを告げました。

葬儀には中村先生が担任していた三年児童と昨年の担任だった六年生も参列して、代表児童が「優しかった先生の明るい笑顔を忘れずに頑張ります。先生も遠いところで見守っていて下さい」と別れの言葉を述べ、縦笛リコーダーで「夕焼け、やけ」「さようなら」など児童全員で先生に教えてもらった曲を演奏し、お別れをしました。

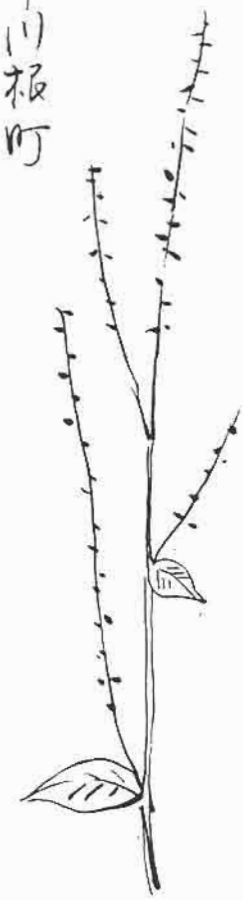
中村先生は、川根高、帝京大を卒業後、中央小学校講師をされて五和小教諭に昨年より片浜小教諭をされていた。

音楽が大好きで、パソコンが得意な、いつも明るい、子供達の指導者、中村先生、あまりに短い生涯であったと思います。

殉職と言う言葉は、人口の少ない川根には、四十年位い前に八木中の渡辺留吉さんが警視庁に勤めていられて、殉職されたという事を聞いたおぼえはありますが、本当に静かな山村にとって、耳なれない言葉でありました。

中村さんのお宅では、家を継ぐべき人を失ったのですが、この悲しみをのりこえて強く生きていってほしいと願います。

中村先生のご冥福をお祈り申し上げます。



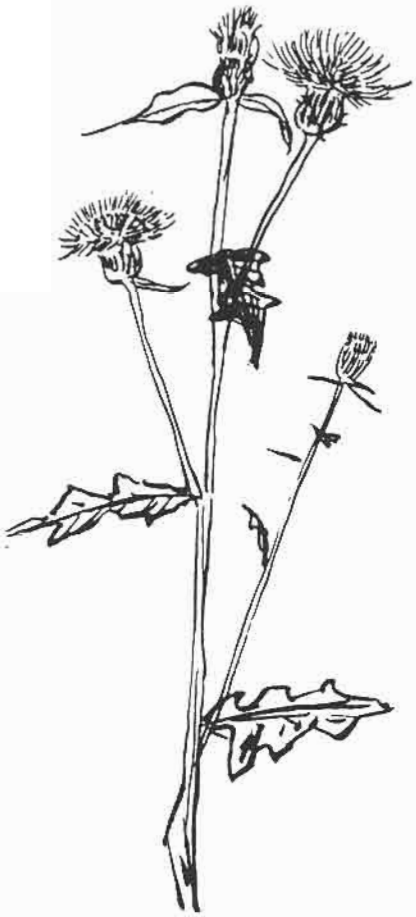
中川根町
助役の勝山彦治さん退任

この七月任期満了をもって、下泉の勝山彦治さんが、中川根町助役の職を退任されました。

勝山さんは、旧徳山村役場職員になられてから、四十三年余この間、助役を二期務められました。

長い間、中川根町の為に頑張ってこられました。堅実な町政を育くんで下さって、本当にご苦労様でした。

次期中川根町助役は未だ決っておりません。秋の号では、ご紹介出来ると思います。



昭和四十年代、よく言われた言葉に『戦後の苦しい時代は通りぬけた＝最早戦後ではない＝』がありました。貧困からの脱出、先進国へ追いつく為に国民の総意で努力した結果、経済、産業の高度成長をなしとげ、国は豊かになりました。そして、この時代、沖縄が日本に完全復帰され、中華人民協和国との国交が回復（樹立）されたのでした。

それは、『戦争の傷跡は決して消えていない、消すことはできない』事も改めて知らなければならなかったのです。

沖縄の米軍基地からは、毎日のように北ベトナム（当時）への爆撃機が飛び立ち、二十年近い歳月を経た現在も、インドシナの国々はゆれ動き、住民は白血病や、赤ちゃんの奇形が多発しているとの事です。そして、中国残留日本人孤児の肉親さがし、が年々行なわれる様になりました。太平洋戦争のさ中、行なわれた、日本国民の満州移民、我が中川根町にも深いかかわりがあったのです。第八号で載せました『昭和恐慌と中川根の経済更生計画』、昭和六十年二月中旬より連載されました、朝日新聞社、地方版"静岡の戦争"、もう一つの中川根村"を、今回号より、特集で組んで行きたいと思います。重複の部分、ご存知の方も、沢山いらっしゃいます事と推察しますが、中川根町に残る、史実として、ご覧いただきたく存じます。

昭和恐慌と中川根の経済更生計画

昭和恐慌は、アメリカ向け、生糸輸出の崩壊と直結する形で描かれてきた。資源のとぼしい日本で養蚕は、国内で原料生産できる数少ない産業であった。昭和四、五年の世界恐慌で、アメリカの経済力は、六十年も逆もどりしたと言われる。不況の風は、世界中を吹き、日本も例外ではなかった。（ロシアのみが世界恐慌外であったという）貿易国日本は、それまで生糸輸出が順調に行なわれ、最大相手国アメリカより、経済力は勝っていたが、生糸輸出の赤字で立場は逆転した。都市では倒産、紡績工場、重工業の工員の首切りで、失業者があふれた。全国的規模で公務員の給料は引き下げられた。東北地方では身売りが続き、昭和十二年（日華事変）頃まで、農山村では、不況が続いた。

満州移民への道のり

村の経済の建てなおしを図るべく、『経営状態を改善し、産業組合をつくり、生産販売を統制し、金融を改善するなどの計画的組織改善を図る』これを推進する地域の『中心人物』を育成する＝自主、自立の村おこし運動のリーダーを育てること、それに加えて、学校、青年組織等に、二宮尊徳の『報徳思想』を教えた。この『中心人物』は、戦後の農地改革のリーダーとなった人物もいる。

『中心人物』が決まったら、町村の経済計画をたてさせた。又隣保共助けの精神や、農村の家々に家計簿（日記）をつける事をすすめ、人々の意識の向上、計画化を図った。意識を変えることは、借金におわれている地域より、多少なりとも余裕のある地域の方が、実行できるものである。施策に乗って、全国で二割くらいの家で家計簿をつけるようになった。農村で二割の人の中には、地主、自作農が多かったと言う。この人々が国を変える力となった。経済更生運動（計画）が成功か、失敗かを問うのは、ナンセンスであるが、地域リーダーを育て、実行過程で、自主・自立の精神を二割の人々はもった、と言う事は成果であり、各地で、農民運動、青年運動が起こり、その生産的エネルギーを『満州農業移民計画』に向けていったのである。

経済更生計画と特別助成金・昭和十一年～十五年まで、経済更生計画が着実に推進している町村に一村あたり一万円前後の施設等の助成金（共同倉庫、索道など）を交付することになった。といっても、施設への助成は、五分の一ほどで、各農家経営改善や、町村団体負担金などにつかわれたという。この計画に後から加えられたのが『満州農業移民』分村計画だった。つまり特別助成金＋満州農業移民の型で助成されていった。この特別助成町村数は全国で一、五九五町村、静岡県では、三十八町村あり、その内、満州分村計画が組まれたのは、五町村にとどまっている。

満州農業移民について、農林省では推進したくないの実状であったという。＝危険な所へ農民を送りたくない＝。しかし当時、軍部＋関東軍の力の強さのもとに、農村の建てなおしをはかる為に、経済更生運動の隣保共助けの精神を活用、満州に対する不安を、地域ぐるみ、家族単位の分村という事で、推進していった。軍部の考えは、満州平定には、軍隊のほかに、武装農民が必要であった。移民は、町村三百戸単位（家族五人）で二十年後には、

満州の人口、五千万人中一割の五百万人を日本人にしたいという事で進められた。満州移民に積極的だった地域に長野県があげられるが、養蚕ひとすじの県であったが由、養蚕農家の没落により、"五族協和、王道楽土"を求め、いち早く満州移民を選択したという。

現中川根町は、当時、旧中川根村と旧徳山村に分かれていたが経済更生計画の晩期特別助成村設置政策の実行の過程で大きな違いがあった。

※旧徳山村は特別助成を受けながら満州移民を進められなかった。

※旧中川根村は特別助成されなかったのに満州分村移民を行った。

注）県内の満州移民村は数少なく、特別助成を受け満州移民を行った村は富士郡　富丘・白糸・芝富・浜名郡知波田・駿東郡愛鷹の五ヶ村であった。

何故このような事になったのか

経済更生運動が展開された昭和恐慌期から、戦時期の大井川中流域の隣りあった二つの山村で、一方は更生運動から「特別助成指定村」に展開した徳山村と、他方更生運動から「満州分村移民」に直結した中川根村の二つのケースの相異をどう捉えるかについて。

まず両村の構造的差異性、ともに林業を中核とするとはいえ、中川根村は、徳山村に比べて、その傾斜度が高いばかりか、無一物の村民の比重も圧倒的だったのである。徳山村は多少とも製茶を含め、農業基盤を持ち得たことから、昭和恐慌に際しても、村民負債の程度が中川根より軽いものであった。このことは恐慌前後の変化にも表われ、税額ランクの変動でみると、徳山村は有意の変化を認め難いが、中川根村は、没落への傾向をより強めたことがわかる。

人々の経済的基盤の相異は、山林労務者となる比重の高い中川根と、より軽い徳山との差に現われたばかりか、産業組合支配力にも差を生じ徳山より中川根がはるかに低い。かくして更生運動にさいしても農家副業を含め、生産力増強に力を傾けることのできた磨山村長と、教師丸山文作の活動の余地を与え得た。したがって磨山は農村振興にあたり、満州への送出による方策には、基本的に応ずることなく対処した。むろん根の報徳思想をもって更生運動を行おうとする立場が生産力としての農民を外部に送出することなく活かすこと、村民の自主・自立をうながしたと言えるが、この発想を可能とする一定の土地が無ければ、それも無力だったろう。しかも「特別助成」にすすめえたのはどうしてだろうか。農政当局には「特別助成」が一定の発展可能性のある村々に鍬をかけるという姿勢があった。その点からは、徳山村は、合致していた。しかし、この「特別助成」の後半は、分村移民政策との連動がうたわれた。それをあえてとらなかったのはどうしてか。まず磨山平四郎が、県立農学校時代、竹山祐太郎と同期の親友であり、竹山が、静岡に帰る時磨山の家に泊まることを習慣とするほどの間柄であった。そこで、竹山が、徳山の窮状克服に力を注いでいる磨山に、更生運動の指定村を受けるようアドバイスした。このことは「特別助成」にも有利だった人的条件である。加えて分村移民に反対の磨山の立場を竹山は理解したといえる。しかし磨山は移民一般を否定していたのではない。一九三三年五世帯二〇名のブラジル移民には、推進役を果している。分村民三〇〇名の移民は、村に残った人々の農林業経営が困難と解していた。

中川根村にとって、浮揚する条件をついに持ち得ないままに、恐慌期をくぐり抜けたところへ、ポッカリ口をあけていたのは、分村移民の「光明」だったに違いない。林業経営に、労働力提供の形で依存するしかなかった中川根村にとって、逃げ場がなかった。その逃げ場も、当局者が予定したように、分村移民志願者が、続々出現するようなものではなかった。「不毛の選択」とは、まさにこの、ことである。長野県、浦里村では、養蚕一すじの生産機構をもっていたが、林業依存一すじの中川根村と、状態が違っていた。農民運動が、ファシズム的弾圧の下で崩される中で、運動指導者が、その身につけた組織活動量をひっさげて、更生運動に転生し、更生すべき養蚕業に未来を見い出し得ないがため、進んで、分村計画に走ったのである。モノカルチュア（ただ一つの事をすること）的には、中川根村も、浦里村も同じ状況かも知れないが、浦里村は、多数の農民が、養蚕業で身につけた、エネルギーを、移民に結びつけた。しかし、日露戦争後の恐慌につづく地域経済が、衰退していくなか、昭和恐慌に決定的に奔弄され、農民闘争も知ることのなかった中川根村の人々は、エネルギーを「涵養」される機会もなかったし、そうできぬ状況が、全階層からの分村移民を形成しえない根拠となったのであろう。

（敬称略）

昭和六十二年　成人学級

静岡大学教授　山本義彦先生　講義より

不毛の選択

貧困からの脱出
満州へ「鍬の戦士」

繁栄を夢見て617人，147人帰らぬ人に

大井川中流の山峡に開けた静かな山村、榛原郡中川根町。川をはさんで南北に細長いこの町は、良質な川根茶の産地として知られ、一面に緑のじゅうたんを敷きつめたような茶園が広がっている。

中川根も林業に頼る山村の例にもれない。戦後の高度成長に伴って、住民は都市へ流出。昭和三十一年当時（旧徳山、旧中川根合併年）約一万一千人あった人口が、現在では八千人を下回っている。家業を継ぐべき若者は故郷を離れ、農家には老夫婦だけがとり残される。たとえ後継者に恵まれても、今度は嫁が来ない。

そうした深刻な過疎に悩んでいるこの村にも、かつて全村の三分の一の世帯を農業移民として満州（中国東北地区）に送り出し、「もう一つの中川根村」をつくろうという壮大な計画があった。

周家川根開拓団――「満州国」の竜江省鎮東県に建設された中川根村の「分村」に入植したのは、十七年から二十年までの四年間で計六一七人。食糧を増産して国のために尽くし、みずからも貧困から脱け出そうと願った農民たちだった。

昭和初期、中川根村は榛原郡でもっとも貧しい農村だった。農家一戸当りの耕地面積は、約四反（約四十アール）。それも多くは山の斜面を利用した段々畑だった。茶のようなし好品よりも、食糧の増産が急務だった時代に、中川根村では一カ月分の米さえ自給できなかった。

元開拓団員らで組織している中川根町拓友会の前会長、高木悦郎さん・梅島さんは当時の村民の生活をこう語る。「大井川鉄道が開通するまでは島田から帆掛け舟で食糧を運んできた。村には平地が少なく、二・三反の田畑しか耕せない農家が多かった。それでは いくら一生懸命に働いても食べていけない。

もう一つの中川根村

戦前まで、米だけの飯はほとんどなかった。麦飯が食べられれば上等な方だった。

昭和十一年、時の広田弘毅内閣は、十大国策の一つとして満州へ開拓民の大量入植計画を打ち出す。二十年間で百万戸を入植させようという遠大な計画だった。「満州国」での日本人支配を維持し、あわせて食糧基地の確保を目的にした満州開拓は、表面上は「五族協和」の「王道楽土」を建設するという、美名で飾られた。開拓民は「鍬の戦士」と呼んでもてはやされた。

中川根村役場でも、次のように呼びかけ、村民の移住を奨励した。

「満州開拓民ハコノ食糧増産ノ第一線ニ活動スル戦士デアリマス。中川根村ニ食糧増産ノ徴用令ガ下ッタモノト国民的自覚ヲ呼ビ醒シ、率先参加シテ戴キタイノデス」

静岡県は十一年の哈達河開拓団から、二十年六月の海城清水郷開拓団まで、満州へ単独開拓団十、他県との混成開拓団七十二を送り出した。計四六万人の送出人員は全国第十二位になる。そのうち、終戦時の混乱や、その後の難民生活などで二八％に当たる一、三万人が帰らぬ人となった。「満蒙開拓青少年義勇軍」として、同じように海を渡った青少年を含めると、犠牲者の数は、さらに増える。

他の開拓団に比べて、被害が少なかったとされる川根開拓団でも、団員の四人に一人に当たる一四七人が死んだ。「国策」に沿い、村の繁栄を祈りながら大陸に移住した農民たちは、終戦の混乱の中で、国家から見捨てられ、命からがらで、一度は捨てたはずの故郷に帰ってこなければならなかった。

※五族協和……五族（中国の漢・満州・蒙古・チベット・ウイグルの五民族）中国辛亥革命の際に、清朝を廃し、五族の協和政体樹立をめざして、孫文らが唱えたスローガン。

※王道楽土……堯・舜ら先王の行なった、仁徳に基づく政治。儒家の理想とする政治思想で、孟子によって大成された（王道）。王道によって、政治の行われている平和な理想的な土地。

青年助役の情熱

水川の板谷年純さんは、三期連続して町議に当選し、現議長を務めておられる。「暮らしやすい町づくりを」――選挙期間中、年純さんが掲げたスローガンだ。過疎化は止まらず、若者が出て行く。町に活気を取り戻すには、若者が働く場所を確保しなければならない。繰り返し、そう訴えてきた。

町に活気を――。それこそ、年純さんの父、故壮吉さんが四十年以上前、情熱を傾けて取り組んだ課題だった。

満州に旧中川根村の分村をつくる。開拓計画を立て、自らも開拓団長として大陸に渡った壮吉さんは、中川根村の満州開拓の中心人物だった。

年純さんも父に従い、少年時代の一時期を満州で過ごした。まだ幼なかった当時の年純さんは、父の壮大な計画を知るよしもなかった。物静かで優しかった父の思い出が残っているだけだ。だが四十年たった今、父の胸中は手に取るようにわかる。

「父は、貧しい村を救うために、開拓に夢を託しました。敗戦で夢も幻となったわけですが、形は変わっても、父の遺志を引き継いでいこうと思っています。」年純さんは、そう語る。

板谷壮吉さんは、明治四十四年、水川で、農家の長男として生れた。高等小学校を出て旧藤枝農学校に入学。「村長になる」と友人に語っていたように、若いころから人一倍、村への愛着が強かった。

昭和十四年、二十九才の若さで村の助役に抜てきされた。就任後、発電所建設に伴う補償金で村役場を新築する際、自ら、設計を手がけた。

内に秘めた情熱家だった壮吉さんは、器用なアイデアマンとしても知られた。測量技術は、森林組合に勤めていた当時、講習会に出かけて習得したものだ。村道の測量にあたったこともある。

「温厚な人柄で敵がいなかったですね。いろいろな面で感心させられる人でした。」小学校時代の同級生、中野幸恵さん＝下長尾＝がなつかしむ。「いずれは村長になってもらう人」村民の信望を一身に集めていた。

県民が満州開拓に本格的に目を向けたのは、昭和十五年になってから。翌十六年四月までに、主なもので四開拓団、約一、六〇〇人が満州に渡った。さらに、静岡浜松市からの送出計画も具体化していた。

県民の満州熱が最高潮に達していた十六年夏、壮吉さんは富士郡が母体となった富士郷開拓団の勤労奉仕隊に参加、満州・奉天省興京県で一ケ月、開拓団生活を視察した。

山に囲まれた狭い中川根とは比較にならない広大な土地。初めて見る満州は、壮吉さんに強烈な印象を与えた。

村に帰った壮吉さんは、村民に満州の素晴らしさを説いて回る。自給自足さえままならない貧しさにあえぐ村人たちにとって、壮吉さんの語る「満州」は、豊かな希望の地のように聞こえたに違いない。

余剰人口を満州に送り出して分村をつくり、残った母村ともども貧困から抜け出そう。村再生の夢を担った分村計画は、急ピッチで具体化した。壮吉さんは先頭に立って団員募集に歩いた。

「何も遠い満州まで行かなくてもいいじゃないか。」開拓団送出計画に反対の声がなかったわけではない。二、三十歳代の若い人たちは、分村計画を積極的に推進したが、五十歳以上の年配者の中には、慎重論を唱える人もいた。

が、「国策」の大義名分と、壮吉さんらの情熱の前に、慎重論は大きな声とはならずに消えていった。

壮吉さんが、富士郷開拓団を視察してから、わずか八カ月後の十七年四月、中川根村の二十四家族、約百五十人は、先遣隊として満州に渡り、竜江省鎮東県長信の土を踏んだ。

朝日新聞、静岡地方版
昭和六十年二月記載
「静岡の戦争」「もう一つの中川根村」より

※今日、一、二回分を転載させていただきましたが、十二回まである、長作です、次回号に続きます。

村再生へ分村計画

余剰人口を満州へ

京丸

長尾川の源は、三ッ星山一帯である。中川根中学校、中央小学校、高郷地区から、その美しい嶺線を望む事が出来る。その山頂に立つと、山半面は周智郡、春野町、杉川を挟んで、岩岳山、竜馬ヶ岳、高塚山が手に取るように見える。その間、こうに「京丸」がある。……

河村計三さんは、歴史の研究をなさっていて、町史、特に智満寺、南北朝に関する研究は、文献・実測全てこなされ、我が町における、その道の権威と言えます。今回は「京丸」について、ご紹介させていただきます。

京丸という名は知っているが、どういう由緒があるのか、聞いたことはない、という人はかなり多い。

ことほどさように京丸は、江戸時代の昔から「秘境」というベールに覆われ、「京丸牡丹」の名とともに、当時の文人達に、好奇の筆を走らせてきた。

京丸に現在あるものについて、年代を推定すると、二代目であろうといわれる刊部尉国吉が、一四一六年（応永二年）の生れであることは、彼の四十九歳の厄除けの願文を刻んだ仏像に明らかで、一四六四年（寛正五年）の年号と、善光寺梵鐘の銘があり、逆算して、彼の生年を知ることができる。従って、その父とされる京丸の始祖、藤原左衛門佐は、当然、南北朝時代晩期にあって、南朝の滅亡を目のあたりにすることができた人物ということになろうか。

「左衛門佐」とは、禁裏（宮中、御所）警護を職務とするものの役職名で「佐」は次官をさす。これを唐名で見ると「金吾将軍」となっており、なおその上に長官である「左衛門督」があり、唐名をみると「金吾大将軍」と呼んだことになっている。水窪に、由緒、親王を奉護した奥山氏は「金吾正」と記されているが、この「正」は、ここでは「金吾ノかみ」と呼んでいるという。親王警護の長官ということである。

ところで、京丸の藤原左衛門佐の場合、誰を警護する「左衛門佐」であったのか。その記録はもとより、一片の伝承すら伝えていない。それどころか「先祖のことに触れてはならぬ」という厳格な家憲によって、その口は固く閉されたまま現在に及んでいる。

終戦後、森下龍雄氏著「京丸幻想」などに、胎坂へ通ずる石切山の尾根の間道に発見された、宗良親王（一三一三～一三八五）の王子、尹良親王の碑は、当時、春野町界隈の話題をさらったが、このあたり、確かとは言えないまでも、どうやら、京丸左衛門佐の存在理由が、おぼろげながら理解できるような気がするのである。

唯、京丸に伝わる話として、「春野町史」の記述では、尹良親王は、一四二四年（応永三一年）この京丸で自害ということになっているという。しかし、ここで若干納得がゆかないのは、この地で自害されたはずの尹良親王の墓は、どこにあるのか。記録にしても伝説にしても、今もって実際に具体的な話を聞いた記憶はない。又「浪合記」では、尹良親王は、一三九六年（応永三年）三月二十四日を討死の日としており、その場所も浪合となっていて、すっと浪合神社に祀られているようである。

また一方、高塚山に葬ったのは、御醍醐天皇の御首級と伝えられ、現在陵墓と推定される跡も残っているという。

――それにしても京丸は、どうしてこうも南朝一色なのであろうか。――

……中略……

東海道ベルト地帯を安心して歩けなくなった後南朝の人達が、次第に山深い地方へ、活路を求めるようになったのも、けだし、自然のなりゆきといえるであろう。

そのような見方からは、思いもよらないような土地に、どういういわれか判らない塚があっても、不思議ではないし、山奥のけものみちの様な路辺に、立派な宝篋印塔があっても、驚くにあたらない。

京丸の高塚山や、千頭山（板取山）の尾根の路傍にあったという、梅の老木にしても、ここを訪れた人達の弁当の梅干しの種子から、いっぱし、一丁前の芽が出るはずもない。いつ、だれが、何を思って、わざわざ梅の苗を植えに登ったのであろうか。

想うに、駿・遠・三・の北辺は、荘園として、領有された古代から、人縁地縁の連携の歴史は、始まっていたから、世を忍ぶ南朝の人たちにとっては、そういう縁故からも、心やすまる、山岳地帯ではなかったかと思う。

高塚山陵墓については、以前、気田村村長であった、天野安平氏が、大正年間にここを発掘されたが、既に掘られた形跡があって、成果は望めなかったと述懐されていたようである。

京丸周辺については、これ以外に「梅の元屋敷」と言うところがあるという。場所はよく判らないが、洞木沢と登った、京丸山中腹とされているようだ。が、墓地ではなく、やはり南朝関係の伝説であるらしい。

京丸については、やはり「先祖のことに触れてはならぬ」の家憲により、判らない事が多いようであるが、貴重な、京丸の生活を表わした文があります。河村さんのつけたり、供、ご覧下さい。

「雲華雑誌」〈京丸村〉一八四二年（天保一三年一二月）刊

柳里恭　こと　柳澤淇園

東海道浜松といふに宿りし時、家のあるじのいひしは、「此ところより天龍川に添ひて、十五里程山に入れば、遠江と信濃との境なる、川添の地に、京丸と呼ぶところあり、其地は他より人の行きかふべきところにはあらず、国の境に藤の蔓もて、長さ五・六十間もあらんと思ふ程の桟をかけたり、處の者は京丸の桟といへり。巾狭くして行くにさえ目くらみ魂消ゆるばかりなれば、彼地へ行くものとてはいと稀なり、某が親の世には、京丸に行きたることあり、などと只噂にのみ其處の事語りつぎて見たる人もなきに、此の宿下男好事の者にて、京丸見て来たらんと、しばしの暇を乞ひて、かしこに行きたりけり。

其地は家僅かに四五軒ありて農の業はすれども、常の食に米は聊かも食はで、稗に小豆を交へて粒とす。この男の行きたる家は、其中にも長と思はるる者にて、麻の織りたるに、尾花を入れたる新しき夜の物を出して着せたるのみにて、敷けるものとては、家のあるじもなし、枕は木の角なるをもて臥さしめたり。

處の人語りけるは「此山を登りて凹か處より見れば珍しき花あり」とて案内しければ男行きて見るに、はるかなる峨のもとに流れあり、水勢の屈曲して激する声のいさぎよきけはいいふべくもあらず。渓間を遠く隔てて、其大きさ二た抱もあらんかと思ふばかりの樹に色紅にして黄を帯びたる花今を盛りと咲きたり。夏の事なれば餘りの暑さに、案内の人は、木の葉をいただきたり。さていふやう「此の花の大きさ髮より見れば左程にもあらねど、此川の末尻といふ處に此花の散りて流れ行けるを拾ひし者あり、花びらのわたり一尺もあるべし」と語れり。いかなる木の花にかたえて知る人なし。遠江の国人はこれを京丸の牡丹として今猶ありといふ。

この頃は人も行きかふ事ありて、此地に至れど此花ある渓へ尋ねゆきて見たる人なしとぞ。舟筏も通はざる地にて人の用なき處なりといへり。四・五軒の家ある中に長とも見ゆるものの家は寺院めきて仏画を懸けたり。其画幅は一向宗の真向光明の弥陀にひとしき大いなるものなり。食物のみを供へ、松をともして燈明とす。花を手向くることなし。夜は燈下なく、炬をもて業となせり。土人は皆総髪にして男女ともに同じ。髭は鎌にてきるといへり。子供も皆総髪にて、衣類には麻のあらきを織りて、尾花蒲の穂などを入れたるを着たり。夏も寒しといふ。

かの男浜松へ帰るにのぞみて、泊りたる家あるじに、銭もて謝しけれども「他国はかかるものにて用を足せども、此地には用なきものなり」として取らず。「家に帰り給ひて後便あらば米を少しにても贈り給はるべし」とて懇ろに藤の桟まで人に送らせ、「さすりて行けかし」とたびたび言ひけるよし。大事に行くべしといふ意にやと宿のあるじ物語りき。

思ふに深山幽谷にわたりては、かかる地もあるにやと思へば、行きても見たきここちなんせらるる。

終

（註）十五里程――約六〇km
一尺――約三〇cm
五・六十間――約一〇〇m
末尻――この川下にある野尻のことか
炬――かがり火やたいまつの火のこと

○ つけたり

京丸は江戸時代になってからも、その時代の新しい文化などにあまり影響されず、南北朝時代を中核とする生活様式が、かなり濃厚に残されていたのではないかと思う。外部との接触も、その環境が孤絶の状態では当然新しいものは入らないし、その必要もなかっただろう。

京丸の祖先が始めてこの山中に入ったときから、徐々に定着した生活様式がそのまま受け継がれてきたものと思う。ここに語られている京丸の生活は、河根地方の山深い集落の中世期の姿でもあるような感じがして、大変興味深い。同時にまた、見ず知らずの人でも懇ろに「藤の桟」まで送ってきて、「さすりて行けかし」と、たびたび言ったという、「心の時代」と叫んでいる現在との距離感では、もう戻ることができないほど遠くへ来てしまったのでは、という淋しさを感じさせるくだりである。

余録

✿京丸　周智郡春野町地内というが、厳密には気田営林署管轄内に「落び地」の状態で存在する民有地である。北辺の山中深く草創年代不詳の孤立した集落、「遠江風土記伝」「周智郡史」などによれば、南北朝時代武士団が土着したのが始まりと伝え古来秘境とされた。藤原左衛門佐を祖とするという。江戸時代から多くの文人たちが筆を染めているが、なかでも「京丸牡丹」は「遠州七不思議」のひとつとして語りつがれている。

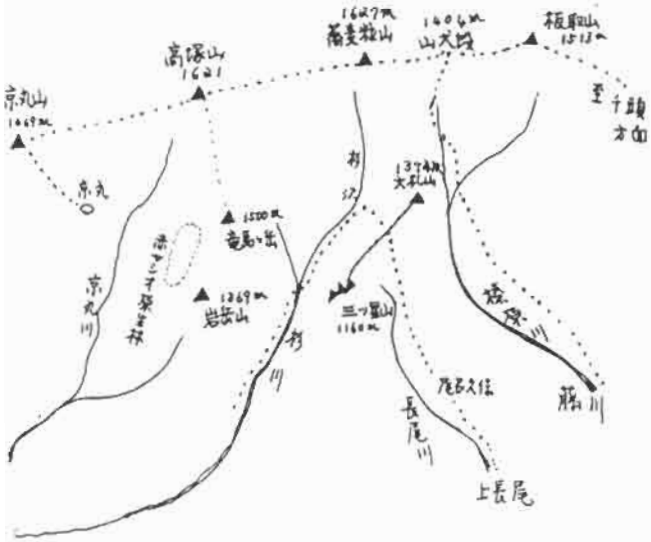
又、京丸へ行く途中小俣(小俣京丸)と言う地区があり、そこには数年前まで小学校があった。そこから京丸までは四キロ以上のみちのりがあり(直線的に昔は道があったらしく――二〇〇メートル程の高距を下って石切川を渡り約五〇〇メートル登って標高二一〇〇メートルの峠を越し約四〇〇メートル下った小俣京丸に至る通路のみ――)、小俣の人達は遠州山地の方言(瀬沢～水川までの方言も同じ)をつかっているのに対し、京丸へ入ると一〇数人の三家族は全く純正な標準語を使われていた。当時京丸の学令児童は二、三人に過ぎなかったが、一族の長老の一老人が毎日膝下に集めて国定教科書で寺子屋式に教育していた。

(又以下、渋井治平氏著　大井川とその周辺より　転載、大正五年取材――)

✿京丸牡丹は？　京丸川を挟んで、京丸の対岸は、岩岳山(一三九九m)竜馬岳(一五〇〇m)の山々が連なり、その中腹は、赤ヤシオ、白ヤシオの原生林がある。開花期は、五月上旬から六月上旬、大札山のヤシオの開花期より一週間以上おそく咲くといいます。ヤシオはつつじ科に属し、険阻な場所に多く見られます。現在この赤ヤシオ、白ヤシオが京丸牡丹と言うことになっています。

かつて大日本地名辞書では、石楠花の花ではないかといわれた事もあったようですが、やはり、高山、岩場を好む石楠花の原生があるのかも知れません。そうすると春から夏まで、京丸に住んでいた人達は、美しい花を見ていた事になります。余談になりますが、大札山方面の赤ヤシオが今年は四月下旬に咲きました。ピンクの花といっても、濃淡があり、久しぶりに見る美姿に〝これぞ京丸牡丹〟と叫びました。赤ヤシオは、芽がある前に花が咲き、白ヤシオは、芽がおてから、葉より上向に花が咲きます。京丸山中腹から、牡丹谷を見下した時、白い牡丹の花も見事に咲いた事でしょう。いづれにしても、深山のみに見られる、言いかえれば、俗世を断って、先祖の教えを護り、きびしい自然に耐えて生きた京丸の人達に与えて下さった天の恵みではなかったかと考えます。

✿高塚山　山頂は、台地形をしていて、広い。
バイケイ草の群生が見られ、周りに木々が無ければ見事な眺望が展開しているだろう。そして、稜線づたいに、山道があったとしたら、京丸から高塚山へは、意外と近い存在だった事が推測できる。



食べもの暦

梅干し

『塩に浸かってからくなり、しそに染まって赤くなり、
三日三晩の土用干し、思へばつらいことばかり、
それも世のため人のため、しわはよっても若い気で
小さい君らの仲間入り、運動会にもつれてゆく。』

大丘初期の国語の教科書にこんな梅干しの詩が載っていた。弁当箱の真ん中に収まって、運動会や遠足にお供をしていた梅干し。最近は、健康食品として見直され、漬物の消費は横ばいなのに、梅干しは伸びている。低塩化が進んだことも歓迎されている大きな理由だ。しわがよってもさすがは梅干しと感心していたら、低塩化の半面、調味料や添加物の使用率が高くなっているという。

―本当の梅干しをさがすことはむずかしい――らしい。

添加物だらけの世の中、梅干しよ、お前もか！といいたくなる。グルタミン酸を使うと、同じ塩分でも塩からくなく感じるそうだ。つぼくないから安心していると、とんでもないことになる。「無添加」表示はあっても天然甘味料やグルタミン酸が入っているので、用心すること……だという。――世のため人のため――の梅干しはどこへ行ったのだろう。

（昨年の毎日新聞記事より一部転載）

減塩梅干しを作ってみたら

塩の量をへらして酢を入れるのが特徴だが、冬場は自然保存が可能かも知れないが、梅干しは六～七月に作るものだから、どうしても暑い夏越しをしなければならない。その内に、水分（塩＋しそ＋酢＋梅酢）の上部がどろどろして来て、やがて青かびが生えた。やはり減塩梅干しは＋添加物、又は＋低温保存がなくては無理かも知れない。冷蔵（凍）庫を、梅干しとらっきょう漬けが占領するのもいただけない感がする。

赤じその葉で漬けこんだまっ赤に染った塩っぱい梅干しが本来の味なのである。塩分を気にしている方々には、食べる量、回数などで調整することが良策ではないのでしょうか。

グルタミン酸のこと

アミノ酸の一種、タンパク質の一成分で主として植物の種子中に存する。水にとけ、味がよい。グルタミン酸ナトリウムは化学調味料の主成分として広く使われている。（かつて頭が良くなるといって味の素をパパとかけて子供に与えた時代があったようです……）

梅酒＋赤じそでドリンクを

梅は梅干しのほかに、梅の砂糖漬けや梅酒も良く作られます。赤じそは酸によってまっ紅に変化する性質があります。

赤じその葉を洗って（汚ない）おきます。大きめの鍋に水を入れ湯立ったところへ赤じそを入れます。二、三分湯でて葉を取り出します。冷えてから、梅酒（梅の砂糖漬け）をませ、びんづめ等にして冷蔵庫に入れて、冷めたくしていただきます。梅酒が無い場合は、クエン酸＋砂糖、レモン汁＋砂糖でおいしく出来ます。冷蔵庫に入れておけば、一週間位保存できます。人口着色でないステキな紅のドリンクをつくってみて下さい。

水筒などのお茶の色を変色させない方法

茶色は紅茶の色なのか？ほうじ茶の色なのか？川根茶の色ではないですね。若緑色のさわやかな川根煎茶も、保温用ポットや水筒などに入れておくと、色が変わって来ます。味の変化も多少あります。それが、お茶の特徴だと思っていましたが、この頃聞いた耳より話があります。水筒などにお茶をそそいでから、氷片を二、三コ入れるんですって。そうすると、色変りがしないそうです……冷たいお茶・お茶をびんに入れて、冷蔵庫で冷やしておくのにはやってみました。色が変わらず、流行の水出し煎茶の様でした。水筒はまだやってみていませんが――

是非おためし下さい。

かしわもちのこと

五月五日の子供の日（端午の節句）にしょうぶとよもぎを軒にかざり（つるし）柏餅を食べる――ふる里の方は月おくれで六月五日にやります。しょうぶ湯にも入る。古くからのならわしですが、柏餅が独特です。

・あんは小豆やえんどうでつくります。
・かわは米粉やモロコシ粉をつかいます。米粉によもぎ（ゆでた）をまぜたりします。
・くるむ葉が、柏ではなくて朴葉をつかいます。殺菌力も富んでいます。手造り大きめかしわ餅は川根の香りがします。

朴の花

暑中お見舞申し上げます

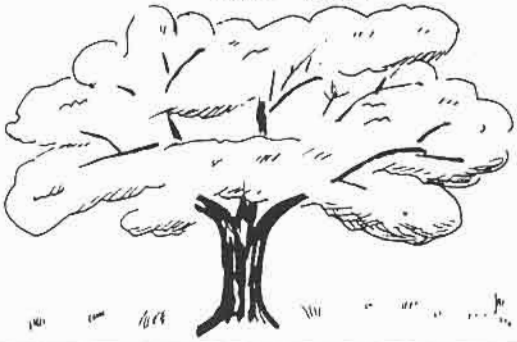
暑い〜夏がやって来ました。
寒暖計の目もりが四口度をさしていたのは驚異
でしたが、朝夕は、山から川から涼風が訪れて、
しのぎやすくなっております
夏休み、お盆には是非
ふる里へ　おこし下さい。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。
1部　干共 150円
皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回（季刊誌）の発行を予定しております。
今回で購読期間の切れる方に、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をお願いします。
年間予約 600円のご送金をおすすめします。2・3年分お送りいただいても結構ですが、10年分……というと、気分的に負担になります。
購読期間が切れて、半年以上ご連絡が無い場合は、勝手ながら中止とさせていただきます。
※住所変更のおりも是非ご連絡下さい。
※問い合わせ先　TEL 0547-56-0015
小沢節子
※払込通知票（郵便振替）
口座番号　名古屋〈7〉－81556
加入者名　中川根ふる里通信係

町内お祭りご案内

7月 14日　平谷の流したい
23日　水川観音堂祭典
30日　徳山地蔵堂　〃
8月 1日　智満寺施餓鬼
9日　智満寺観音堂祭典
15日　徳山浅間神社祭典
－県指定無形民俗文化財－
徳山の盆おどり、が行なわれます
13日〜16日
お盆
24日　うら盆
9月 15日　藤川大井神社、下泉八幡神社　〃祭典



✿"となりのトトロ"ってご存知ですか？子供向けのアニメーションで、トトロは楠の大木の精なのです。母親の入院、父親と女の子二人の田舎の生活が生きいきと描かれていてさわやかなストーリーです。鼻の出たバス・デコボコ道・田んぼ・畑・小川・井戸・ポンプ……昭和三十年頃の生活環境がよみがえって来ます。
「懐しい、みんな私の世界だった。」「子どもや孫にも、こんな体験をさせたい。」「青い鳥の"思い出の国"へ行ったみたいな感じ。」
――まだふる里には少し残っているかも――
機会があったら、となりのトトロ、ご覧になってみてね。

✿春の号の"中川根の自然環境について"はとても好評でした。又の機会に続篇をお届けお来たらと考えております。
今回号の内容はいかがでしたか？太平洋戦争の事は、もう忘れた、知りたくない、とおっしゃる方も多いかとも想像します。しかし今、知っていてもらいたい、と――心もまよいます。皆様のご意見もお聞きしたいのです。